
Phantasy Star ZERO Fantasia

荒地

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Phantasy Star ZERO Fantasy

【著者名】

ZZコード

荒地

【あらすじ】

新米ハンターである主人公が、様々な冒険や色々な人々との出逢いを繰り返し、ハンターとして、人間として成長していく物語。

第一話 出逢い（前書き）

初めまして、モフモフです。Fantasia頑張って書きますので、応援宜しくお願いしますm(_ _)m。
一応、二次創作です。嫌いな方は読まないことをお勧めします。

第一話 出逢い

「はあ、はあ。ここにモンスターは、どんだけ出て来るんだア？」「と、少しキレ気味に文句を言つてているのは……

STAR（種族：ヒューマン 職業：ハンター・男 装備・片手剣カトラス）だ。

「文句言わないの。出て来る敵エネミーは倒すだけよ」

彼を宥めているのは……

サリサ（種族：ヒューマン？ 職業：ハンター・女 装備・短杖ウォンド）である。

彼らは、ここニグラーシア渓谷でドラゴンを撃退するという依頼クエストを行させている。

何故こうなったかとさうと……サリサの乗っていた脱出用力プセルの破片がSTARの顔面に落ちてきたからだ。

「何この脱出力プセル、壊れてるじゃない！？キチンと点検されてなかつたのねきっと……。ビビビビビビッショウ！？何をビビッしてどうなろう！？」

自分でも、言つていいことが整理できなかつた。

ヒュ～、と空に響く花火の打ち上げるような音が、それを如実に表していた。

STARは、その音に気付き、空に目をやると脱出用力プセルの破片が、すぐ上に迫つていた。

「う、うわア アア……」

その叫びに反して、破片は降つて来る。

その刹那、破片がSTARの顔面にクリティカルヒットした。

サリサは破片がぶつかって気絶したSTARをテクニック・回復レスタで

介抱した。

STARが意識を取り戻したので、

「良かつたあ…」

と安心した様子でサリサが言った。

「君ハだれだい？」

そう訊くSTARに答えて、

「私は、サリサよ」

と答えたので、STARも自己紹介をした。

そのあと、サリサに、

「依頼ハ？」

と訊いた。

「依頼つて、ここノモンスターを全て倒すこと?」

「違うヨ、奥ノ、ドラゴンを倒すことダヨ」

と、言つたのを聞いて、

「続いてるよ。だつたら、私を仲間にしよ、一人だと大変だろうから

と、サリサが、手伝いたいと言つた。

そして、今の状況に至る。

To be continued .

第一話 出逢い（後書き）

いつも、朝宮です。

友人のモフモフさんの書いた物を歌成音さんが若干手を加えた作品です。

初投稿となりますので未熟な点もござりますが、今後も「荒地」共々どうか御観覧に。

御意見・御感想・アドバイス、お待ちしております。

第一話 活躍（前書き）

でも、モフモフです。

皆さん、私の作品楽しんで頂けていますか？

そこの方も、そうでない方も、今後とも宣しくお願ひします。(一)

それでは、本編へどうぞ。

第一話 活躍

STAR達は、随分と奥に進んで来た。

STARが、

「エネミー、沢山いるね。俺に、任せなさい！」
と言つて斬りに掛かる。

STARが狙うエネミーは、ドリゴンの子供だ。
コイツは、炎のテクニックであるフォイエつかを使用つてくる。

打撃攻撃はタックルのみだが…。

どちらの攻撃もダメージは大きい。

そして、攻撃後の隙も又大きい。

「今だ、突撃ダア！」

と声を張り上げるSTAR。

「クロスレイブ！」

掛け声と同期するように飛び上がり、目の前を十字に切り付けた。
ガウルを一撃で斬り倒す。

「すごい…」

サリサが呟いた。これぐらいのことは、STARにとっては当たり前のことなのだが。

驚いた顔をしているサリサをよそに先に進むSTAR。

張りきつて小鷲ヴァルカを倒しながら進んでいく。

サリサは氷のテクニックであるバーダをSTARの後方から放ち、
STARを援護してそれらを倒した。

「すごいねエ。ん？待てよ、サリサ。君もヒューマンだよネ？」
STARが、サリサに尋ねる。

サリサは、

「ただけど、どうかした？」
と答えた。

それにSTARは、

「いや、何でもない。聞いてみただけだ」

と返した。

STARが言いたいのは、ヒューマンは接近戦が得意なのに、サリサがテクニックをよく使う事が気になつたということだ。モンスターを倒すと、暫くしてアイテムボックスが出現した。これは、破壊する以外に何もなさそうだ。

破壊するとアイテムが散乱^{ちりばら}ばつた。

それらは、この後に役立ちそうな品々だつた。
一番役立ちそうな物は大劍^{ソード}だつた。

攻撃力は高いが、動きが鈍くなつてしまふ。

言わば、諸刃の剣だ。

扱い慣れる迄に時間が掛かるだろう…。

STARは武器を大劍^{ソード}に持ち替えた。

そして、使い慣れない大劍に振り回されない様にするため、2
度試しに振つて見る。

ブンッ。

風を斬る音が心地良い。

STARは、この大劍^{ソード}が気に入つた様だつた。
素振りを終えてから奥に進むと、ワープゾーンがあつた。
STAR達は、それに向かつて進んだ。

To be continued

第一話 活躍（後書き）

いつも、朝富です。

今回もモフモフさんと歌成音さんが頑張ってくれました。

誤字・脱字、アドバイス等ございましたらどんどんお送り下さい。

それではまた次回。

第三話 期待（前書き）

いつも、モフモフです。今回は、サリサのイメージがチェンジするかも知れませんよ（^▽^）
何がどうかは、読めば解ります。では、どうぞ。

第二話 期待

ワープゾーンに入ると…、中間地點にワープしたらしい。

そこには、ヴァルカー2羽と赤い双角獣^{ヘリオン}がいた。

ヘリオンは、炎属性の攻撃を得意としている。

と言つても、飛び掛かりやのし掛かりだけだが…。

喰らえばほぼ確実に火傷を負つてしまう。

「私に任せて」

とサリサが言ったので、STARは彼女に任せることにした。

サリサはウォンドをヘリオンに振りかざし、詠唱を始める。

「喰らいなさい。氷付けにしてあげるわ」

そう言つと、氷属性中最強のテクニック・ラバータを当てる。ヘリオンとヴァルカーを瞬く間に凍らせてしまった。

「…………」

STARは、呆然としている。

なぜならSTARは、サリサがそこまで強いと思つていなかつたら。

彼女に対するイメージは、”サポート役”といつものだった。だが彼女は、STARのイメージをぶち壊した。

我に戻つて氣が付く。

早くトドメを刺さなければ、と。STARはサリサに呼び掛ける。

「早くトドメを刺しなヨ！」

それを聞いたサリサは、氷撃^{バーナ}を放つ。

サリサがトドメを刺すと、謎のテレポーターが出現した。謎のテレポーターは、ゲート状の装飾が施されている。

「入ろう」「三ツ四

と、興味津々様子で誘うSTARに対し、

「厭な予感がするわ

と心配するサリサ。

そんなことは聞かずに、STARはテレビポーターへと足を踏み入れる。

後で後悔することにならうとは、誰も知る由も無かった。

「ヒーハ、なんだネ？」

その呼び掛けに答える様に響く声が、聞こえる。

『ヒーハアリーナ。汝らには、ヘリオン共と闘つてもうつ。勝てば、景品をくれてやるつ。だが、負ければモンスターどもの餌になつてもらひや』

声が消えると、目の前にヘリオンと、ヘリオンの亞種である、黄色い体色の一角獣が現れた。

一匹でも面倒なのに、三四同時は危険窮まりない。

「…ド畜生」

STARが言った。

この二人に勝機は有るのか？

To be continued

第三話 期待（後書き）

いつも、朝宮です。

月一更新の自分としては週一で更新できるモツモツさんが羨ましいです。

それでは皆様、また次回。

御意見・御感想お待ちしております。

第四話 後悔（前書き）

モフモフです。

まず、前回不手際が有つたことをお詫び申し上げますm(—)(—)m
今日は、気をつけたので大丈夫だと思います。.

読んでみて、変な所はござ指摘下さいm(—)(—)m
では、どうぞ。

第四話 後悔

「面倒ダナア」

STARが面倒くさそうに言つて、何かを探し始めた。
探していたのは、氷結罠だ。

「仕掛けたヨ。ヘリオンども、かかつて来いや！」

STARが、上げ調子で挑発する。

双角獣たちが、STARに近づいたその時、フリーズトラップが炸裂する。

双角獣たちが、凍り付けになった。

「チャーンス！」

STARが一角獣に突っ込む。

斬つて斬つて斬りまくる。

その後ろから、サリサがテクニックで援護する。

だが、無情にも氷結罠の効果が切れてしまった。

双角獣達が動き始める。

そうして、生き残りが突進^{つっこん}で来る。

ただ、一角獣が潰したので、先程よりはマシだ。

「一匹ずつ潰していくヨ。その方が、早く片付くと思カラネ」

サリサは、その意見に賛成した。

STARが斬りつけ、サリサがテクニックを当てる。

残りの双角獣の一匹が倒れた。

最後の一匹が、STARを襲う。

低度の火傷とかすり傷を負つた。

それにも構わず、STARは双角獣に向かう。

そして、トドメをさした。

その場で痛がるSTARを、サリサが手当てる。

どうやら、痛みを今まで感じなかつたらしい。

手当てをしているサリサが、STARの事で気になつていた事を聞

いた。

「今まで、一人でやつて来たの？」

STARは、

「カイと言つ仲間がいたヨ」

と答える。

サリサは、

「いたつて、どういふこと？」

と、訊いた。

STARは、

「シティーに帰ったヨ」

とだけ答えた。

サリサは、その話に納得できなかつた。

そんな中、アイテムボックスが現れた。

例の景品という奴だらう。

STAR達は、それらを叩き割つた。

中には、低ランクの武器や防具を強化するアイテム、モノグラインダーが入つていた。

景品を取り、アリーナを後にした。

To be continued

第四話 後悔（後書き）

どうも、朝富です。

不手際、というのは前回のラスト付近、ヘリオンとブレイズヘリオ
ン合計三匹の比率のことだそうです。
では皆様、また次回お会いしましょう。

第五話 皿鉢（前編）

「いつも、モフモフです。すみません、また、ミスしてしまいました。今までの五話は六話です。では、どうぞ。

第五話 目的

アリーナからでると、巨大なテレポーターがあつた。
それは、恐らく先にはこの依頼の目標がいるのだろう。
STARとサリサは、準備を整えてそれに向かった。

どうやら、崖の近くに飛ばされたらしい。
予想通りに、今回の目標である炎竜レイバーがいた。

見た目こそ小さいが、本物のドラゴンだ。

サリサが、

「本当にこんな所にドラゴンが居たんだ。本でしか見たこと無かつたのに……」

と言つた。

サリサは、初めて見るらしい。

STARも、そうだ。

そんな呑気な事ばかり言つては居られなかつた。

炎竜レイバーが、襲い掛かつて来る。

早速、炎息吹ヒートブレスを吐いてくる。

サリサは、モロに喰らつてしまつた。

「熱いッ！助けて！！」

と言つてゐる。

援護する側が、される側になつてしまつてゐる。

STARは、サリサに状態異常解除薬コンドードライバーを投げ渡す。

サリサはそれを、攻撃を受けた所に塗つた。

サリサが、炎竜レイバーに反撃をする、

「喰らいなさい」

そう言つと、炎竜レイバーに雷撃ソンドを当てる。

レイバーが、怯んだ。

その隙に、STARが怒濤の攻撃を仕掛けた。

STARが、炎竜を倒してしまった。

「はあ、はあ…やつたよ。私たち、勝つたよ」とサリサが嬉しそうに言つた。

遠くから声が聞こえる。

「お~い、STAR！」

この声の主は、カイしか居ないとSTARは思つた。

その予想通り、カイだつた。

「STAR、その娘は、誰だ？」

カイが、STARに聞く。

STARは、

「サリサだ！」

と答える。

カイが、サリサに

「はじめまして。立ち話もなんだから、シティーで話そつ」と言った。

そのあとに、こう付け足す。

「STAR、サリサをシティーまでエスコートしてあげな」

STARは、サリサをシティーまでエスコートする事になった。

To be continued

第五話 田村（後書き）

今回は、私、モフモフが後書きも書くコトになりました。どうでしたか？炎竜との闘いは。呆気なさすぎましたか？元がゲームなので多分そんなモノだと思います。では、次回もお楽しみに。

第六話 帰還（前書き）

モフモフです。ダイロノシティヤー、遂に登場です。名前の由来は市長の名前です。では、どうぞ（^O^）／

第六話 帰還

ダイロンシティーに着いたSTARたちは、グレイの友人であるカイを捜した。

「カイ、出て来いや！」

STARは、叫びまくった。

そういうして、カイは見つかった。

「カイ、話って何サ？」

グレイと話しているカイに、STARが話し掛ける。

「おっ、来たか」

とカイが言った。

カイが、続けてこう言った。

「話つてのは、サリサをダイロン市長に会つてもううことだ

サリサは、

「分かつた」

と言つた。

カイが続ける。

「市長の前で髪の話はするな」

サリサは頷いたが、頭の中にはハテナマークが浮かんでいる。ドキドキしながら、会いに行くと

「やあ、良く来たね」

と言つて、市長が優しく迎え入れてくれた。
髪が薄くなっている市長は、

「やあ、STAR君」

とSTARに声を掛ける。

カイが、市長に

「どうしてそこで、アンタは俺をスルーするんだ?どう見たってオレがリーダーだろうが……」
と訊いた。

市長は、

「STAR君が近くにいたからね。なに、特に深い意味はないよ」と言い返す。

カイは、納得せざるを得なかつた。

苦々しい表情のカイは、本題を切り出す。

「今日は、ハンターズの新人を連れて來たんだ」

市長は、

「ああ、そうだつたね。君が、新人のサリサ君かい？」

サリサは、市長に

「私みたいなのが、ハンターズに入つても大丈夫なの？」

と訊いた。

市長は、

「カイ君辺りがそんな事を言つたのかね？ひどい奴だね、君は」と言つた。

カイが、

「なんで、アンタは俺を^は嵌めよつとするんだ？」

と聞き返す。

市長は、

「君の過去をバラしてしまつよりもマシだらうっ」とカイに刺すような口調で言つ。

カイは、何も言い返せなかつた。

どうやら、カイには知られたくない過去がある様だ。

晴れて、サリサはハンターズの一員となつた。

市長が、サリサに

「古代の遺跡を壊してゐる犯人を知らないかい？」

と聞いた。

「そんな、罰当たりな」とカイが言つた。

知らなければそれでいい、といふことで話は締められた。

市長の部屋から出て、カイが言つた。

「STAR、これからはお前自身が依頼を決め
クエスト
それを聞いたSTARは、快く承諾した。

To be continued

第六話 帰還（後書き）

今回も、私、モフモフが後書きも書いてみたいと思います。シティーの全容は見えませんでしたが、そのうち明かしていきたいと思っています。次回も、お楽しみに。

第七話 EXTRA・上巻（前書き）

どうも、モフモフです。フリークエスト、第一段です。市長の私情のクエストです。本物のゲームなら、クエストタイトルが、市長私情命令です。では、どうぞ(^〇^)／

第七話 EXTRA・上巻

STARは、ダイロン市長の秘書のリングドウに呼び止められた。
今回の依頼の説明の様だ。

「STARさん、少しよろしいですか？ 実は、今回の任務について少しお話したいことがあります……」

STARは、話を聞く事にした。

リングドウは、STARを人気の少ない所に連れて行って、面と向かって話を始めた。

「このあたりなら、誰にも聞かれませんね。では、あらためて……何か、言いにくい話のよつだ。

「今回の任務なのですが、市長直々の緊急任務であることはござ存知だと思います。

ですが、緊急任務自体がすでにおかしいのです。緊急の依頼が来たわけでもありませんし、市長が求めている植物も、何かの特効薬というわけでもありません。

そもそも、資料にすらほとんど載っていない植物を、市長がどうやって知ったのか……。情報の出所すら分かりません。

……とまあ、ここまで説明の通り、今回の任務については、分からぬことだらけなのです。あの様な市長ですから大丈夫だと思いますが

何か、とても公言出来ない様な裏があるのかもしれません。

それだけは、気に留めておいてください。私も、市長の動きに気を配つておきます。」

そう言って、更にこう付け足した。

「……それと、植物のある場所の近くにはドリゴンの巣があるので、くれぐれも気をつけて下さい」

それを聞き終えて、出発するSTAR。

“今回の依頼は面倒だな……”とSTARは一人で思っていた。

少し、不安が脳裏を過ぎよった。

To be continued

第七話 EXTRA・上巻（後書き）

今回も、私、モフモフが後書きを書くコトになりました。どうでしたか？STARは面倒なクエストを受けたと思いませんか？まあ、どんな内容はそのうち分かります。では、次回も、お楽しみに。

第八話 EXTRA・中巻（前書き）

どうも、モフモフです。前回の続きです。後、一回はこの調子でいきますんでよろしくお願いします。

第八話 EXTRA・中巻

STARが随分進んだ頃のシティーでは、ダイロン市長は鼻歌を歌つていた。

「ふふうん、ふふふふうん」

リンドウが、市長に

「……鼻歌とは、珍しいですね、市長。何か良いことでもあったのですか？」

と訊いた。

市長は、

「あ、ああ、リンドウ君か。ビックリさせないでくれたまえ。」

と言つた。

リンドウは、

「私は秘書ですから、いつでも市長のおそばにいますよ。繰り返しますが、何か良いことでも？」

と言つた。

市長は、

「いや、特に何もないよ。気にしないでくれたまえ。」

とじまかす。

リンドウは、

「そうですか」

と呆れた様子で言つた。

バレバレの嘘に気づかないふりをしていたのだが。

暫しの無言。

市長は、リンドウを自分の部屋から追い出そうとしたが、リンドウは

「私は、秘書ですか？」

と言い外に行こうとした。

「やう見られていると仕事がしにくい。だから、席を外してくれた

まえ」

とまで言わされたので外に出た。

だが、やはり気になるので部屋を覗く事にした。

市長は、何かを探している様だ。

探し出した箱には、今回の依頼で採つて来る植物が入っていた。

市長は、その箱の中の植物をすり潰していた。

“変なことに、ならなければ良いのだけれど…”

と、リンドウは願つていた。

To be continued

第八話 EXTRA・中巻（後書き）

今回も、私、モフモフが後書きも書きます。どうでしたか？市長は、私情をクエストにしてまで発毛作用のある草が、欲しかつたのでしきつね。では、次回もよろしくお願ひします。

第九話 EXTRA・下巻（前書き）

どうも、モフモフです。なんか、読む人達が日に日に遠ざかっていく様な気がしてならない某でございます。そんなコトは、さておき、この作品どうですか？自分では、イマイチ分かりかねるので、感想を下さい。では、EXTRAの完結編です。

第九話 EXTRA・下巻

STARが植物に近づいた瞬間、ドラゴンが現れた。だがSTARは、植物を抜き取り、あっさりドラゴンを始末してしまった。

その頃の市長は、リンドウを部屋に呼び入れていた。

「随分と早いねえ…」

と、市長はリンドウが部屋に来た早さに驚いた様だった。

「誰が来ても、ここに入れない様にしてほしい。大事な用事があるから」

リンドウは、その言に従つ事にした。

しかしながら、そんな市長を心配にも思つ。

ちょうどそんな時、STARが帰つて來た。

リンドウがSTARに、~~お~~居をして市長の部屋に乱入することを提案した。

しかし。

市長の部屋から、嗅いだことのない異臭が漂つてきた。

リンドウは形振り構わず市長の部屋へと踏み込んだ。

「な、何事かつ！？」

と、狼狽した様子の市長。

しかし、かなり奇妙な点があつた。

リンドウは市長に、

「……市長？ 何故に、そのように頭を緑に染めていらっしゃるのですか？」

と訊いた。

市長ははぐらかそうとしているが、言葉が出てこないようだ。

その奇妙な光景と市長の頭皮の状況を鑑みて、リングドウは

「俗に言つ毛生え薬ですか？」

と訊いた。

図星だつたらしく、市長はさうにつけたえる。

市長は、黙つていてくれるなら報酬に色をつけないと言い出した。

だがリングドウは、そんな市長を手厳しく叱つた。

勢い任せの市長に部屋を追い出されたSTARとリングドウ。

部屋の外で、リングドウはSTARに

「今日の事は、他言無用ですよ」

と釘を刺した。

報酬を受け取つたSTARは、畠然とした。

スクスクシャワーなんてその辺にありそうな短銃ハンドガンが追加されている

だけだったのだ。

To be continued

第九話 EXTRA・下巻（後書き）

どうでしたか？EXTRAは、主人公が市長でした。次回からは、元に戻ります。また、読んで下さい。

第十話 サリサの感動（前書き）

どうも、ご無沙汰です。モフモフです。最近、余りアイデアが浮かばなかつたので、休んでました。でも、期待して待つて頂いてる方も、いると思い蘇りました。では、どうぞ。

第十話 サリサの感動

今回の依頼は、リオウ雪原で捜査隊の救助だ。

サリサは、雪を見るのは初めてらしく、

「すごい……これが雪……なの？本で読んで、白くて冷たいって言うのは知つてたけど……」

と感動している。

カイは、サリサに、

「なんだ、見たこと無かったのか？まあ確かに、初めて見るとスゲーって思うよな」と、言った。

サリサは、

「うん、すごいね！本に書いてあつたよ、いつ言つのを銀色の世界つて言つんでしょ？これが全部、氷の結晶だなんて、とても信じられないよ」

興奮気味のサリサが言つ。

カイは、

「へえ、良く知つてるな、そんなこと。お前のいたシティーってのは随分と教育に力を入れてたんだな。オレなんて、最初に見た時は、ホコリでも飛んでるのかと思つたぜ？」

と、肩を竦めてみせる。

「……え。ああ、うん。私のシティーがどう、と言つよりも私がそういうのを調べるのが好きだったのよ」

そんなサリサに、STARは、雪玉を投げつけた。

「わふっ！な、何、それなに！？」

サリサはおもいっきり取り乱した。

STARはサリサに雪玉を見せた。

「ああ、なるほど。雪を丸くして、それを投げたんだ。……で、なんで私に投げるの？」

若干引き攣つた表情でSTARに訊いた。

それにカイが口を出す。

「STARはきっとサリサに構つて欲しいんじゃ無いか？お前の雪を見る眼差し。今まで一番キラキラしてたからな」

それにサリサは照れて、

「べ、別にはしゃいでるつもりはないんだけど…もつ子供じゃないもん！」

「まあとにかく、先に進むとしよう。捜査隊が冷たくなる前にな」と皮肉げに言つた。

サリサは、

「どっちの意味かは分からないけど……さ、STAR、行こう」
渋々、といった顔でSTARもやつてくる。
捜査隊が捜索対象とは皮肉なものだったが。

To be continued

第十話 サリサの感動（後書き）

どうでしたか？また、感想下さい。では、また、次回…。

第十一話 ウサニー大パニック（前書き）

どうも、お久しぶりです。モフモフですよ。半年ぶり?に書きました。どうぞ、読んで下さい。

第十一話 ウサニー大パニック

少し先に進むと、ウサニーと呼ばれるウサギ型の敵エネミーが表れ出て來た。

「うわあ、カワイイ！あれも敵なのかなあ？」

サリサが、嬉しそうに訊いてくる。

どうやら、カワイイものが相当好きならしい。

「カワイイけど、アレは敵だ。氣は乗らないけれど倒さなければいけないヨ」

サリサは、スケッチブックを取り出して描き始めた。

絵だけでも、残したいらしい。

「まあ、絵ぐらいならいいだろ？……」

カイも、絵というのは賛成らしい。

サリサ以外の、STARとカイは暫しの間は休息をとることにした。とは言つても、ここは雪原だ。

「寒いナア……。サリサは、平気なのだろ？カ？」

STARは、少しサリサを心配した感じで独り言で呟いた。

「さあな？」

カイもまた、独り言で呟いた。

ただ、カイは身振りも交えているけれど。

どれ程の時間が経過したであろうか。

誰も分からぬ程の時間が経つた様にSTAR達は感じたが、実際は一時間しか経っていなかつた。

サリサが向こうで、

「出来たあ~~~~~」

と叫んでいる。

出来たらしるので、サリサを連れて、もう奥に進むことにした。

サリサは、ずっと二二二二二としていた。

そんなサリサにSTARは、

「あれよりカワイイと噂の敵もいるらしいぞ」

と言った。

サリサは嬉しそうに頷いた。

To be continued

第十一話 ウサニー大パニック（後書き）

どうでしたか？先に進まない？そんなコトはないですよ！…少しづつ進みますよ。では、次回お楽しみに。

第十一話 調査隊の女戦士（前書き）

いつも、モフモフです。今回は、このクエストを次に繋ぐための話です。つまり中間地点です。
では、どうぞ（^〇^）。

第十一話 調査隊の安否

リオウ雪原の中間であらう場所でSTAR達の一一行は立ち止まつた。カイは、急にSTAR達に話を振つた。

「ずいぶん奥までやつて来し、少し休むとしよう。といひでSTAR、寒くないか？」

STARは、自分の心配よりサリサを心配して、

「サリサ、大丈夫？」

カイは、嬉しそうにSTARに、

「お、いいぞSTAR。自分より先に、仲間を気遣える様なら、ハンターズとして一人前だ」

と、言つて褒めた。

「STAR、私なら大丈夫だよ でも、心配してくれてありがとう」と、サリサはSTARにお礼を言つた。

暫くしてサリサは、何かに気づいた様に、

「ねえ。さつきから気になつてたんだけど、あれは何？」

と、遠くに見える光の筋を指差した。

その光の筋は、空に向かつて伸びている。

カイは、

「ああ、あれか。オレ達は、『天の柱』と呼んでいる光柱ライトポールだ。まあ、

詳しく述べ知らないのだがな。分かつてているのは、夜にあつちの方向を見ると光の帯が見える。ただ、それだけだ」

と言つて、少しため息をついた。

それを聞いたサリサは、

「天の……柱……」

と呟いた。

カイは、この話題はもういと言わんばかりに終わらせ様とした。

「まあ気になるよな？誰だって一度はそう思うんだ、あれは何だろ

うな、つて。だけどな、その答えは誰も知らない。あの『天の柱』まで辿りついたヤツはまだ誰もいないからな。いずれ正体の分かる日が来るかもしれないが……それよりも、今は調査隊を助ける方が優先だろ?』

と言つたのを機にサリサ達は、真剣みを取り戻した。

サリサが、

「うん、そうだよね。今は、とにかく調査隊を探しに行かないとね」と言い終わつた頃に何処からともなく声が聞こえてきた。

「……誰か! 誰か、助けて下さい!」

STAR達は、気づいた。

「! ? なんだ?」

カイが叫び、

サリサが人影を捉えて、

「……見て! 誰か走つて来るよ!」

走つて来たのは、見た目から判断すると調査隊のメンバーの様だった。

「はあ、はあ、はあ。よ、良かつた、ヒトがいた! お願いします、助けて下さい! 隊長が、兄が敵エネミーに襲われているんです!」

カイは、調査隊のヒトに、

「あなたはシティーに戻つてくれ! その方が安全だろ?」

サリサが、いつに無く真剣な表情で、

「ゆつくりしてはいられないね!」

と言つたが、カイはサリサに、

「……つて、なんだか嬉しそうだな、サリサ!」

サリサは、少し照れて頬をほんのりピンク色に染めて言つた。

「え? ……うん。ちょっと失礼だけれど、自分が物語の登場人物みたいな気がしてね」

そんなこんなで、STAR達は最深部に向かつた。

To
be
con-
tinued

第十一話 調査隊の女めの（後書き）

どうでしたか？いつもと一緒に？それはそうですよ、作者が変わらない限りはね。では、次回お楽しみに（^○^）

第十二話 何のために？（前書き）

お久しぶりです。モフモフです。前回の投稿から早くも9ヶ月……。
自分は、今回は考えに考え抜いたモノになつたと思っています。
では、本文をどうぞ（^○^）／

第十二話 何のために？

「ねえ、STAR。このあたりが危険なことはみんな知つてたんでしょう？それなのに、なんであのヒトたちはこんな危険なところまで来たのかな……」

サリサは心配しながら、尋ねる。

STARは、

「ロマンのため

と、答えた。

サリサは、納得いかないという風に首を振つている。

「ロマンは大いに結構だが、あいつらの目的は、やつこいつとは別のもんだと思うぞ？」

カイは、何かに気づいたらしい。

「つまり、こういう事だ。古の時代の遺物ってヤツの中には、それこそ、オレたちの生活を変える様なすげー便利な物もある。調査隊は、そういうのを見つけるのが仕事だ。だが、それが安全なところにあるとは限らん。むしろ危険地帯にこそ多い。それでもあいつらは、命も顧みずに危険地帯に行くんだ。みんなのために、仲間のために、すげーモノを見つけるために、な」

と、いうのがカイの考え方らしいが、どこか自分のことを語つている様にしか聞こえなかつたSTARだが、今はあえて聞かないコトにした。

「だからこそ、ピンチのときには、ハンターズの出番だ」

カイは、心得たと言わんばかりの顔をしている。

「ゴメンね。変な口聞いて……」

サリサは、少し申し訳なさそうだ。

「大丈夫だ、問題ない。お前は、変じゃねえよ！」カイは、構わないとサリサを励ました。

「…………そ、そう? じゃ、先に進もう STARたちは、調査隊たちの捜査に向かうためこそこそ奥に進んで行くのだった。

To be continued

第十二話 何のために？（後書き）

どうでしたか？雪山も大分奥に進んで来ました。実は、次のシーンに戦闘が控えています故、また考えを深めて書いて来ますので、次回をお楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9945j/>

Phantasy Star ZERO Fantasia

2011年8月15日22時38分発行